

ストラヴィンスキー：イタリア組曲

バレエ・リュスの主宰者ディアギレフは、ペルゴレージの作品を用いてバレエ音楽を作曲するよう、ストラヴィンスキーに依頼した。そして 1920 年に完成したのが、一幕のバレエ音楽《プルチネルラ》。ストラヴィンスキーは同作をもとにいくつかの室内楽を作ったが、《イタリア組曲》もその 1 つ。1934 年にポーランド出身のヴァイオリン奏者サミュエル・ドウシュキンと共同で編曲した。

ラヴェルのヴァイオリン・ソナタ

「ヴァイオリン・ソナタ(遺作)」は、パリ音楽院に在籍していた 22 歳のラヴェルが 1897 年に作曲した単一楽章の美しいソナタ。創作の最初期に書かれた作品にもかかわらず「遺作」と名付けられているのは、未出版のままその存在が忘れられていたため。ラヴェルの生誕 100 周年にあたる 1975 年に自筆譜が発見され、出版された。初演は作曲当時、ジョルジュ・エネスコのヴァイオリンとラヴェルのピアノにより非公式にパリ音楽院で行なわれたと伝えられている。

「ヴァイオリン・ソナタ」は 1923 年に着手されたが、完成には 4 年の月日を要した。初演は 1927 年、ジョルジュ・エネスコのヴァイオリンとラヴェルのピアノによって行なわれた。なお、本曲を献呈されたのは、女性ヴァイオリン奏者のエレーヌ・ジュルダン＝モランジュ(彼女はもともと初演者として予定されていたが、病を患ってその任を果たせなかった)。不思議な透明感に満たされる第 1 楽章、ジャズへの関心が表れた第 2 楽章、そして第 3 楽章ではヴァイオリンが息をつく間もなく軽やかに躍動する。